

## 續洋畫問答

黒田清輝君答  
乙 羽 生問

(問) 日本に油繪の出來た始には司馬江漢と云ふものがあつたさうですが、さう云ふ人の考へはどう云ふ心持で油繪を入れたものでせう、

(答) 推察で行くより外に仕方がないですけども、司馬江漢以前に西洋風の畫をかけたのは私の見た内では畫いたのより西洋の畫を模寫したの、方が多い様です、先づ斯う云ふ和蘭陀の繪があるとか云ふのを見て、是れは珍しい畫だ眞正の物の様に見へると云ふので影の付いたものを一寸眞似て見たのでせう、司馬江漢は一つの見識が有つて、かう云ふ風の畫が眞正の畫と云ふものだと思つて、まきりにやつたらしいです、其後のうき畫と云ふは只前の人が不完全ながら骨を折て考て置いた畫きかたの方法丈を傳へたものと見へます、

(問) それからもう一步進んで貴方が小督と云ふものを御書きになる御考はどう云ふのですか、

(答) あの小督のことは何です、始めて私が京都に行つた時に考へ付いた、

(問) 始めて京都に行つた時と云ふのは佛蘭西から御歸りになつて何年程経つてからです、

(答) 佛蘭西から歸つた年ですが、歸つて東京に二た月ばかり居つた、それから行つたのです、行く時に友人の久米と一緒に رفتつた、私は小供の時に本國を出てから佛蘭西へ行くまでは東京に居ましたから東京の風俗は分つて居るが京都なんかはまるきり知らなかつた、西洋で始終思ひ出して居た日本の風俗は東京の風俗で東京の風俗は

あ、だ、つ、た、斯、う、だ、つ、た、と、思、つ、て、居、ま、し、た、が、京、都、に、行、つ、て、出、遇、は、し、た、風、俗、は、ま、る、き、り、知、ら、な、い、風、俗、で、西、洋、で、讀、だ、  
 西、洋、人、が、日、本、に、旅、を、し、た、時、の、日、記、が、今、更、思、ひ、當、つ、て、そ、れ、は、吃、驚、し、ま、し、た、ど、う、云、ふ、點、で、吃、驚、し、た、か、と、言、へ、ば、風、俗、が、  
 東、京、と、違、つ、て、居、る、京、都、に、來、て、始、め、て、日、本、と、云、ふ、一、風、變、つ、た、世、界、の、外、に、在、る、様、な、珍、ら、し、い、國、に、來、た、様、な、心、持、が、お、ま、  
 した、先、づ、旅、人、と、し、て、第、一、番、に、見、物、し、た、の、は、圓、山、か、ら、祇、園、町、で、し、た、其、處、で、其、祇、園、町、の、舞、子、杯、に、至、つ、て、は、天、下、無、  
 類、で、す、ね、へ、實、に、奇、麗、な、も、の、だ、と、思、ひ、ま、し、た、西、洋、人、が、日、本、の、女、は、小、さ、な、奇、麗、な、鳥、見、た、や、う、な、も、の、だ、と、云、ひ、ま、す、  
 が、成、程、奇、麗、な、觸、は、つ、た、ら、壞、は、れ、さ、う、な、一、つ、の、飾、物、だ、と、云、ふ、何、し、る、珍、ら、し、く、て、ま、ら、な、い、様、な、感、じ、が、起、つ、た、直、  
 に、此、の、不、思、議、な、人、間、の、寫、生、を、始、め、ま、し、た、又、赤、毛、布、流、に、彼、處、に、行、か、う、と、か、此、處、に、行、か、う、と、か、云、て、久、米、と、一、緒、に、名、  
 所、の、見、物、も、し、て、歩、き、ま、し、た、其、時、に、で、す、丁、度、あ、れ、は、何、時、頃、で、し、た、か、矢、張、り、十、一、月、頃、で、し、た、ら、う、私、が、西、洋、か、ら、歸、  
 つ、た、年、と、云、ふ、の、は、戰、争、の、始、ま、る、前、年、で、す、か、ら、廿、六、年、で、す、ね、へ、其、廿、六、年、の、十、月、の、末、か、十、一、月、の、始、で、し、た、が、清、水、寺、  
 邊、の、景、色、を、寫、し、に、行、つ、た、序、に、ア、ノ、清、閑、寺、へ、ぶ、ら、く、遊、び、に、出、掛、け、た、彼、處、は、散、歩、に、大、變、宜、い、行、て、見、る、と、其、處、に、  
 穢、な、い、坊、主、が、居、た、其、穢、な、い、坊、主、は、即、ち、後、に、私、が、手、本、に、使、つ、た、坊、主、で、す、寺、と、云、ふ、の、は、丸、で、明、家、同、然、庭、は、艸、だ、  
 ら、け、破、障、子、の、中、に、も、ぐ、く、し、て、居、る、者、が、一、人、居、る、こ、れ、も、頭、が、丸、い、そ、う、し、て、變、に、へ、た、ば、つ、た、様、に、し、て、居、る、能、く、  
 見、る、と、非、常、な、婆、さ、ん、だ、こ、れ、は、坊、主、の、御、母、さ、ん、で、八、十、幾、歲、と、か、九、十、幾、歲、と、か、云、ふ、年、寄、一、寸、話、を、し、て、は、直、に、南、無、  
 阿、彌、陀、佛、と、や、る、親、子、二、人、で、此、の、山、の、中、に、住、ん、で、居、る、と、云、ふ、次、第、な、ん、で、す、全、躰、其、坊、主、と、云、ふ、の、が、大、變、孝、行、者、で、  
 此、の、二、人、の、者、が、頭、を、丸、る、め、て、此、處、に、住、ふ、迄、に、は、隨、分、難、儀、を、し、た、そ、う、で、す、こ、ん、な、話、は、あ、と、で、聞、た、事、で、先、づ、其、時、に、  
 は、穢、な、い、埃、だ、ら、け、の、緣、側、に、腰、打、掛、け、て、さ、う、し、て、此、處、は、ど、う、云、ふ、所、で、す、か、と、話、し、か、け、た、さ、う、す、る、と、名、所、圖、繪、に、書、

い、て、あ、る、通、り、の、説、明、を、仕、始、め、た、此、處、は、歌、の、中、山、と、言、つ、て、陵、が、向、ふ、に、あ、る、二、つ、陵、が、あ、つ、て、さ、う、し、て、其、二、つ、の、方、の、陵、の、垣、の、中、に、小、督、の、局、の、お、墓、が、有、る、こ、ん、な、事、を、話、し、た、の、が、話、が、上、手、で、何、ん、だ、か、變、な、心、地、に、な、つ、て、來、た、ま、る、で、昔、の、時、代、が、其、儘、出、て、來、る、や、う、な、心、地、が、し、た、其、日、は、其、儘、歸、つ、た、歸、り、路、で、久、米、に、オ、レ、ハ、今、の、話、の、時、に、變、な、氣、持、に、な、つ、た、と、言、つ、た、ら、己、れ、も、そ、う、だ、つ、た、と、言、つ、た、實、に、不、思、議、だ、之、を、一、つ、何、か、に、拵、え、て、遣、ら、う、と、思、つ、た、の、で、す、其、時、始、め、て、小、督、を、書、い、て、や、る、こ、と、に、極、め、た、極、め、た、と、云、ふ、の、で、は、な、い、が、何、時、か、話、を、す、る、所、を、拵、え、て、見、や、う、と、思、つ、た、そ、れ、で、今、の、舞、子、だ、の、田、舎、者、な、ど、を、引、き、擦、り、出、し、て、そ、う、し、て、手、を、組、ま、せ、た、り、何、か、し、て、談、話、を、聞、て、居、る、場、合、に、拵、え、た、そ、れ、が、其、拵、へ、始、め、な、ん、で、す、其、後、色、々、形、を、變、へ、て、見、た、の、で、す、が、も、の、に、な、ら、ぬ、で、す、か、ら、其、儘、に、う、ち、ち、や、ら、か、し、て、置、た、の、で、す、其、内、に、戰、さ、は、始、ま、る、し、又、戰、へ、出、掛、け、る、と、云、ふ、事、に、も、爲、り、ま、し、た、威、海、衛、は、落、ち、て、私、が、日、本、へ、歸、つ、た、の、は、廿、八、年、の、二、月、の、中、旬、過、<sup>な、か、ば</sup>、で、し、た、そ、れ、か、ら、問、も、無、く、博、覽、會、の、仕、事、を、す、る、や、う、に、命、ぜ、ら、れ、て、京、都、に、止、ま、つ、た、丁、度、其、頃、に、西、園、寺、侯、が、京、都、に、來、ら、れ、て、繪、の、話、が、出、て、何、か、書、か、な、い、か、戰、争、に、行、つ、た、か、ら、戰、争、の、繪、は、ど、う、だ、と、言、は、れ、た、か、ら、そ、れ、は、何、ん、で、す、か、是、非、と、も、戰、争、の、繪、を、書、か、せ、度、い、と、云、ふ、お、考、で、す、か、と、聽、い、た、ら、そ、れ、は、是、非、戰、争、の、畫、を、と、云、ふ、譯、で、は、な、い、何、で、も、良、く、出、來、さ、へ、す、れ、ば、宜、い、と、云、ふ、こ、と、だ、そ、れ、な、ら、ば、前、か、ら、貯、へ、て、居、る、も、の、が、一、つ、有、り、ま、す、か、ら、京、都、に、居、る、を、幸、ひ、そ、れ、を、一、つ、か、い、て、見、た、い、と、言、つ、た、其、處、で、愈、々、私、が、あ、の、畫、に、取、掛、る、と、云、ふ、事、に、爲、つ、た、の、で、す、

(問) で、あれをおやりになつたのは、在來の日本の油繪を書く順序とは方法が餘程違つて居るですな、

(答) あれが當前の方法なんです、あゝしなくツては油繪は書けぬだらうと思ふ、人間は神様でないから一々寫生してそれからそれを畫師の考へ次第に直して往かなければ立派な繪は書けない、それを誰もやらない、目くらへ

びのたとへ様なものだらうと思ひます、

(問) あれは何時頃迄に出来上がるですか、

(答) さうですねへあの展覧會に出した丈の下畫は重に人物で、あれに附屬する景色は甚だ不充分でしたから昨年の秋に又京都に出懸て御陵の邊の景色を寫して來ました、もうこれで下畫丈は全く出来上つたです、これから直接にあの畫に取りかゝるのですが、今一寸仕かけた事が有りますから、此の二三ヶ月間は手を下す事が出来ません、今年の夏の間出来る丈やる考ですが、夏の間に眠むたい目で以て大して書けないだらうと思ひます、こう云ふ譯ですから今からはつきり何月頃出来るかと云ふ事は分らない私も成る可く早くやり上げる積りなんですけれども、ああ云ふものはそう詰めてやる譯に往かぬですから子、

トこれで、その話が止んで、アトハ雜談に移つた、折から來客もあつたので、予は再訪を約して家に歸つた、(完)

明治を代表する出版元である博文館の支配人、大橋乙羽（一八六九～一九〇一年）との問答である本文献は、明治三十二年三月に同じく博文館より発行された『名流談海』に再録された。『絵画の将来』では『名流談海』掲載のものを収録している。

『名流談海』では、日本の油絵に対する留学後の感想（本書四〇頁）中にある「甘い」が「旨い」に訂正されている。また「小督」、すなわち『昔語り』の完成見通しについての問答（本書四四頁）はカットされている。『昔語り』の完成作は明治三十二年一〇月五日～十二月一〇日開催の白馬会第三回展で発表されており、『名流談海』の刊行はその後であったためであろう。



黒田清輝《昔語り》焼失